

# 悲歌に血吐きし

(昭和三十年寮歌)

柳田和朗君 作歌  
菅原幸雄君 作曲

## 序

悲歌に血吐きし我らもが  
永劫不変を探求めんと  
遙々漂泊来たりても  
赤き浜茄子摘みとりて  
悪魔牛耳り詩吟する  
天下不仰の寂寥児

## 春

未知の世界に立ち薫る  
冬の名残りか歓喜か  
春爛漫のただなかに  
手稲の山の淡雪の  
雪解が衣の袖軽ろき  
門出が詩歌を讃歌わんや

## 夏

原始の森に深く入り  
朱碧混じる眩さに  
神秘無象の影さして  
郭公生命の顫律で  
若き誇りに酔い痴れて  
自由の頌歌歌うなり

## 秋

朝の白露は詩を吟じ  
夕陽紅く舞い乱る  
秋風高歌昂然と  
踏轟ろかすストームの  
孤袖の遊子大望の  
希望に宿る北極星

## 冬

雪崩に雪を血で染めて  
若き生命を捨つるとも  
あこがれ清浄き樹氷恋い  
奥山古き谷間小屋  
空想の羽の頂上に  
炉火囲み唱う歌

## 結

年古る樹々は皆朽ちて  
生の心が落葉の  
記憶の底に沈みいで  
悲哀の涙ほとばしる  
世の暗闇にひそめども  
去る二年を謳歌えんや